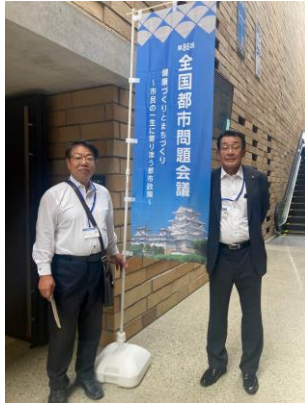


第86回全国都市問題会議参加報告書

令和6年10月21日

貝塚市議会議員 食野 雅由 様

阪 口 勇
川 岸 貞利



【開催日】 令和6年10月17日・18日

【会 場】 アクリエひめじ（姫路市文化コンベンションセンター）

【内 容】健康づくりとまちづくり
～市民の一生に寄り添う都市政策～

◇第1日：10月17日(木)

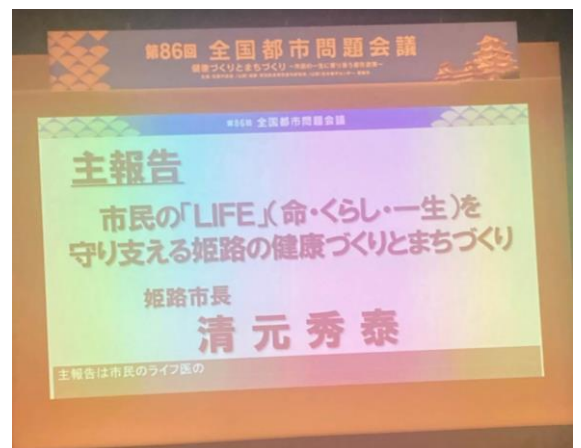
9時30分より全国市長会会長広島市長 松井一貫氏の挨拶で始まりました。姫路市長清元秀泰氏の歓迎の挨拶がありました。その後、兵庫県知事職務代理者の兵庫県副知事 服部洋平氏が開催県としてのお礼の挨拶がありました。

9時50分より、生物学者、青山学院大学教授福岡伸一氏による基調講演とし、「動的均衡の視点から」という観点で話されました。

10時55分から、清元秀泰姫路市長から主報告として、「市民のLIFE(命、くらし、一生)を守り支える」と題して話されました。

人生100年時代の将来を見据え、上記の題を市政の基本方針に施策を積極的に展開。健康づくりによる好影響は、人と人、人と地域のつながりが生まれ、生きがいの創出や地域経済の活性化など多岐にわたる。

そして、姫路市が取り組む「介護予防の促進」、「ウォーカブルなまちづくり」、「ICTを活用した健康づくり」、「未来を担う子ども達の健やかな成長を支援」の4つの事について具体的な取組みの説明がありました。



まちに活力を生み、明るい未来を切り拓いていくための原動力は「人」であり、健康は人づくりの根幹をなすものであると考えて、子どもから高齢者まで、全ての市民の「LIFE」が輝き、誰もが健やかに生き生きと暮らせるまちの実現をめざしていきたいと主報告を締めくくりました。

午後からは、一般報告として

① 筑波大学システム情報系教授 谷口 守氏

「生き物から学ぶ健康なまちづくり」

② 千葉県流山市長 井崎 義治市長

「都市そのものを健康にするまちづくり」

③ 兵庫県立大学副学長 畑 豊氏

「IT/AI の健康分野への適用例」

の3つの報告がありました。

①では、各市町村がバラバラにコンパクトシティを推進しようとしている現状では、コンパクト化とはまったく逆の分散化計画にしかになっていない現実があり、補助金を使っている競争をするのではなく、周囲と協調しながら都市構造の体質改善をはかり、求められている健康なまちづくりをすること大切だとはなされました。

②では、健康は個人の責任と考えず、都市そのものを健康にすることが重要と考えた。

20数年前市長となった時、流山市が直面していた危機は、少子高齢化と東京から住む家を求めて、宅地化が進み肥満化していた。大規模宅地開発が進み、緑が失われて行っていました。

しかし、2008年から人口減少が始まっていました。失う緑を少しでも回復できないか。課題の1つだった。

そこで、環境価値、景観価値を高め、定住人口を増やす取組み「グリーンチェーン制度と認定制度」を平成18年にスタートさせた。緑を増やし、ヒートアイランド現象抑制、環境のいい住宅地域づくりをすすめた。

また、平成19年には、流山市健康都市プログラムを策定、健康にかかわる5つの分野で、多岐に渡り展開。認定保育園の新設、増設で待機児童ゼロにするため懸命な取組みも行った。

そして、要配慮児童の保育園の受け入れの拡充と補助金制度の設置や支援もおこなってきた。その結果子育て世代が増え、子どもの数も大幅に増えているとのことでした。

③では、「健康づくりとまちづくり、市民の一生に寄る添う都市政策」に関して、「健康診断データを用いた解析とファジィ論理による健診データ評価」と「AIによる嚔下解析と誤嚔の対策」について話され、専門的な話で難しいものでしたが、健康についてファジィ論理やAIなどで分析し、誤嚔性肺炎を起こさない為の方策として歌唱の推奨を取り上げ、それを広げることで嚔下機能の維持を狙ったものです。



◇第2日：10月18日(金)

二日目は、9時30分よりパネルディスカッション

コーディネーター：中央大学法学部教授 宮本太郎氏

パネリスト：高岡病院児童精神科医 三木崇弘氏

NPO法人日本栄養パトネット理事長 奥村圭子氏

長野県茅野市長 今井 敦

大阪府泉大津市長 南出 賢一



まず、コーディネーターの宮本氏から、健康問題は市民の幸福度に大きくかわかることであり、自治体で注目されてきている。市民の健康に対する自治体の取組みに大きな差が出て来ている。元気人口をいかに増やすか、どのような市民を対象に考えながら施策を進めていけばいいのか。市民の「元気」や「健康」のために自治体ができることは何か。元気な自治体を作るために、市民を巻き込んで限られた健康資源をどう活かして行くのか考えていきたいと話された。

そのあと、パネリストの方からそれぞれの取組みについて話されました。

特に印象深かった話は、こどもを診察していると、11歳でゲーム依存症や15歳で死にたいと言う子どもがいる。子どもとは、未来の街を作る人である。そのために、健康、健全な大人になる必要がある。しかし、不登校が増え、自傷・自殺も増加、半グレ等行き場のない子どもが増えている。環境と相互作用できる人になってほしい。だから子どもが安全で安心できる環境、信頼できる大人と接する居場所が必要である。子どもの環境施策は、まち、コミュニティ、人づくりが大切と話された。

また、「栄養パトロール」の話がありました。

高齢者が栄養不足となっていることが9年前の調査でわかっており、健康寿命を延伸することで医療依存度を高めないようにするため、栄養パトロールを取り入れる自治体が増えている。顔が見える栄養パトロールを行っているとのこと。

茅野市長からは、諏訪中央病院と一緒にやっている取組みの紹介がありました。地域包括ケアシステムにマンパワーだけでなく、DX・AIを活用したお話がありました。

泉大津市長からは、官民連携・市民共創のまちづくりについて話された。泉大津市健康づくり推進条例の制定。「健康状態の見える化」・「学びの場の充実」・「食育の推進」・「多様な選択肢の提供」の4つを中心に取り組んでいると話されました。

今回の全国都市問題会議に参加して市民の健康づくりが都市の幸福度をあげることに大きくつながることが、多くの取組み事例の報告やパネルディスカッションの話で感じられました。

子どものころも含めた健康、高齢者の健康寿命を伸ばす取組みをもっと施策として取り上げて行く必要性を感じました。

市民の幸福度をあげるためには、健康問題は大きなものであり、こどもも含めた人と人とのつながりづくり、つながり合う地域づくりも健康づくりに大切なことだと感じられた研修でした。

特に、「子どものためなら何をやってもいいじゃないか」と話された高岡病院児童精神科医 三木崇弘先生の意見が印象的でありました。

